

あそびの中から生まれたいろいろの活動について

村田修子

私どもは、何か特別の事情が無い限り、三歳児から卒業までかわらないで持ち上がる。という経験を多くしてきました。

それについての是非論はさまざまでしょうがそれはさておいて、三月に卒業させた人たちを思い出しながら、その三年間を振り返つてみると、特殊な事柄についての印象を除いては、やはり卒業まぎわの姿ばかりがすぐ浮かんできます。

そこでこの生活は、毎日毎日が新しい上に楽しく、またとても忙しくて、いろいろなことに追いかけられ通じで過ごしてしまって、幼児の現在の瞬間や姿をとつて、そればかり一心にみつめてします。ですからこの変化の多い三年間でさえも案外短く感じられます。卒業の前に、三歳児だったときの写真をみましたら、その成長のすばらしさに改めて目を見張ってしまいました。

もちろん、身体的な面ばかりでなく、精神的なものも、それに伴う行動的なものもすばらしいものです。そこで、三年間に子ども自体の中から発生したいろいろの活動例や取り扱いについてあげてみたいと思います。

この種の活動はいろいろの段階がありますが、極く淡く初步的なものは創造性の豊かな幼児のことですから、割合に早い時期からみることができます。それは個々であったり、二、三人のグループであったりします。例えば、あいた箱などがあれば、それが家になります。手で持つところをくぶうして手さげになつたり……というようになります。

ところが、それが何かの気運によって多くの人の興味をひき、ほとんど組の全員が参加して、予想もしなかつた方向へ発展していくものです。

そういうたよな、ややまとまつたものの例をあげていてみます。

○山のぼり（三歳児の二月頃）

時期……冬山の登山について、訓練の写真とか、スキーの写真が紙上をにぎわしていたころ。

あそび……小高くなっているところに綱を持って上った一人が、下にいる一人に（間隔は二メートルぐらい）綱を投げてつかまらせてたぐり、引っ張り上げている。

「何しているの？」



○鬼ごっこ（三歳児の三月はじめ）

「やまのぼってるの」
「先生ものばらせて」（重いから、とはいわなかつたが）
「だめ！」

「これを見ていた他の二人が組んで同じようにやりだした。
二日ぐらい続いただけでこのあそびはきえてしまつた。危険では

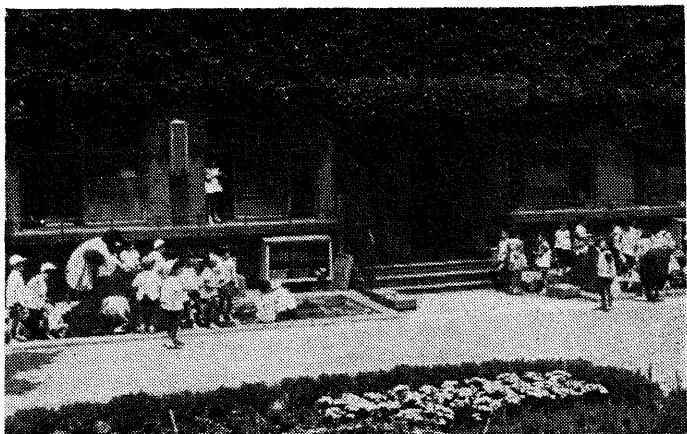
ないし、バランスをとりながら、わざわざ大変そうなようすをして協力してやつていることからして、もつと他の人にも見せたり、話したりして扱えば、おもしろく発展したのではないかと思われます。

○砂山の作りっこ（五歳六月）
砂場で大きな山をおおぜいで作り、くらべっこをする活動は毎年のように見かけます。

はじめ同じ組同士でしていたものが、隣の組との競争になるとお互いに意氣が上がり、背ぐらいいの山を作ります。「こつちは下の方が大きいかな、高くしてもくずれない」とか、「叩いて固めるとだ

入園したての頃は鬼ごっこさえ知らない人もあるって、鬼のようすをしておいかけると、頭をぶつけていやな顔をしてすくんでしまう人や、ワーッとこわそうに声をあげる人さえいます。この時期になると、そういうことはほとんどありませんが、話の中、テレビの中などに鬼がでてくると、目や耳をふさぐ人もあります。指の先にくつついたビニールテープの先がとがっていたので、鬼のまねをして他の人にみせていたことから始まって、組中の人が長い時間かかって、指全部にそれをつけてみせにきました。私が「こわい、こわい」と庭に逃げでますと、喜んで皆で追いかけてきます。

高い山のつくりっこ



○うまとび（五歳十月）
誰からいいだしたのかは分かりませんでしたが、砂場でうまとびが始まりました。砂場の中央でしたから、その点はよいのですが思議なように毎年一度はみられるあそびです。

んだんによい形になるなど話しながらしていると、一つの目標に向かってみなが力を合せてやります。

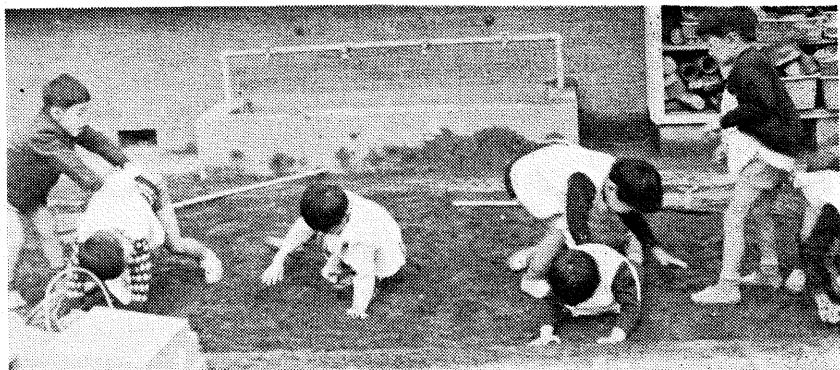
例え違うようによろうとする人があつても、皆の反対にあって協力せざるを得なくなります。頂上に砂がのせられないくらいになると一応くらべっこになります。空間に手をおいて計り、相手方までその高さを保ちながら歩いていくようすのおかしさなど、不思議なように毎年一度はみられるあそびです。

ささえる腕の力の弱い年齢であることや、手をついてとび上がる、という協應動作なので、「先生が見ているときにだけやりましょうね」ということをきめました。このようなめんどくさいことをき

ひとりずつ順番にうまとび



みんなつぶされる



めたせいか、このあ
そびも余り何度もみ
られませんでした。

○おばけ大会（五歳七
月）

休みの日に遊園地で
「おばけ大会」をみ
てきた人の発案で、
まだ何の用意もない
のに、よその組へ
「おばけ大会をしま
すから見にきて下さ
い」と案内してきて
しまったために、小
さい組の人たちがた
びたびへやをのぞい

細い棒の先にひもをつけ、その先にやわらかい紙などつけて、自
分はかくれていて顔をなでるのだと張り切る人、こわそなものが
をかぶって周囲によせた机の下にかくれて、人がきたらとびす
のだときゅうくつな下へかくれる人など、いろいろふうして、
やつと人を呼べるようになつたのが十一時少し前、どうやって作
ろうかという相談というよりも、私はただ皆が次々に要求する材
料を調達するだけ、という状態で、この間一時間半ぐらい、他の
組の人たちも「おばけ」などというスリルにみちたものだけに、
まだか、まだかと順番にみにきて、折角、計画のある各組の先生
方に迷惑のかかるほど、招く方も招かれた方も興奮状態という中
で、私だけが手もちぶさきたに、ただどういうものがきてどうな
るのか見つめる、という状態でした。

帰る前に、「小さい組の人がとてもこわかったといってたわ」と
伝えると、「だって一しょうけんめいこわくやつたんだもの」と
満足げにいうのを聞くと、子ども自体に興味のあるもの強さ、
を今更のように感じたのでした。

(四歳児の「兵隊さんごっこ」五歳児の「花やさんごっこ」の例
は後に記してあります)

やつておどろかそう
かといろいろなもの
を作りだしました。

こうして三年間を振り返ってみると、子どもたちの中から生ま
れてきたこのすばらしい活動に対してもった处置というものが、と
つさの判断を要することだけに「適当であった」といえるものばかり

りではありません。「あの時はこうすればよかった」とか、「もう少し時間をかけねばよかったです」ということなどがたくさんあります。

この種の活動を発生させたり、また生まれてきたときの扱いかたというものは、その場、その内容などによっていろいろでしあうが、刺激を与えることの大切さというものを再認識しました。

考え方によつては、

幼児の環境やら身辺に

存在するものなど、す

べてが刺激といえるで

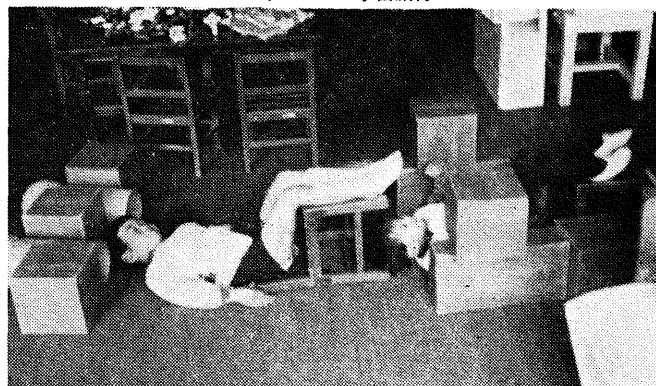
しょうが、次のように
分けることもできると
思います。

○社会一般よりの刺激

ニュースにより話題

となつたものがすぐ
にあそびの中に入ら
われてきます。たと
えば、宇宙ロケット
に人がのつたことが
報道されると、椅子
や積木などをくみ合
わせて（写真A）の

ロケットにのって宇宙旅行



ならんでかけあし



○友だち間での刺激

子ども同士の接触によ

つて、その話題になつた
経験を再現したり、直接
の経験がないまでもそれ
を模倣するという、友だ
ちによる刺激も大きいも
のです。

四歳の頃、男の子の間で
兵隊さんのまねがさかん
にやられました。そこで
使われる用語、たとえば
敬礼・前進・後退・おり
しけ・右へならえなど、
「よく知っていること」
と感心してしまうほど適

ようには形態を水平にさせて一人のりの点をくふうしてあそびが展開します。

体操の競技会やオリンピックなどのことがテレビで報道されたりしますと、それを見た人の経験からすぐにこれが始められたといふことは、園だけではなく、個人の家などでも多くの人が経験したことです。

当に使っている上に、その方法をリーダーになる人が教えるのです。一列横隊に並んでいる人に、「敬礼」と号令をかけておいて、その方法、手の角度などを直してやっているのです。並んでいる人もそれをいわれた方法でやって、結構樂しそうでした。現在はあまりみかけないそれらのことを、どういう方法で知ったのかと不思議になりましたが、人間の本能の中に、みんなと一緒に規律正しくすることへの快感を好む気持ちがあるのでないか、とさえ考えてしまふほど楽しげでした。



○教師による刺激

教師の刺激は即ち指導につながっているわけです。それには適当な言葉で、また物によって与えることができます。いずれにしてそのように仕向けました。

そのリーダーはいつもぶんちゃんでした。他の人々は「たいちよう」と呼び、その上に名前のぶん、というのが加わって、「ぶんたいちよう」と呼ばれました。おとなはそれらと関係のある「分隊長」を連想してしまくらいた堂々としたものでした。あまり好ましいことではありませんでしたが、一気にとめることがはないで、いろいろとそれに関係のある話などをききましたが、比較的夜のおそい時間に、ある戦争もののテレビをみていることも分かったので、親にも連絡して、なるべく違う方向の話ををするように計るとともに、「たいちようは何でもできなければだめね。鉄棒でもリレーでもね。今度はみんなでそろってそういうのもやってみせてね」というように比較的不得手なものをあげたり、「今度はだれがたいちようになる番なの」とといって交代させたりなどして、本人にも、また他の人たちにも一人だけがえらいと思いつかせないように、それぞれの得意な面がだせるように話題をもつていくようにしました。そのふんいきによつては、「おもしろそうだから、先生もいれてね」とうしろからまねをしてついていきますと、何となく空気を察するのか「こんどは○○をしようか」などと全然違ったあそびが始まることが多いので、そのように仕向けました。

教师の刺激は即ち指導につながっているわけです。それには適当な言葉で、また物によって与えることができます。いずれにして

も、いろいろな環境が整っていること、並びに、教師がひとりひとりの個性をよく知った上で適切な指導をすれば効果をあげることができます。

例……

三月三日のひなまつりの集まりをひかえて、心せわしくその練習などをして二月半ばのある日、朝早く起きた人がきれいな色紙を見つけて一つの花にしたのをみた人たちが、私も私もいろいろにくふうして花をたくさん作って、ただ机の上に置いていたので「あら、この花散ってしまったの、かわいそうに」といかけると、すぐ「先生割箸ちようだい」ということになって花らしくなってきました。

それでもできたのは横たおしになつたままなので「何とかして立ててあげたいわね、くしゃくしゃになつてしまふから、えー」と考へるようすをしていると、すぐ「びんに立てよう」とい

うことになつてやつてみたが、花が大きいためにたくさんはさせないので、ちょうどあつた浅い箱に穴を開けると、「それでは倒れると」と文句をいう人や「先生つていい考へだすじゃない」とほめる

てくれる人などさまざまで、結局穴を小さくしておいて、ぎゅっとさし込めば安定することが分かり、きれいな花壇のようなものができ上がりかけました。その頃から作る人が何人か（本当は作ることがあまり得意でない人たち）が机の上にそれを並べ、「はなやさん」と看板を書いてつるし、花屋さんごっこがひとしきり続

けられました。

五歳児ともなると、あそびが少しづつ変化しながら長いこと一つのものが続けられるので、この日も予定していた練習をとりやめて、あと一つ三日の日に何をしようか、と迷っていたものについて、「そうだ、もう少しこの花屋さんあそびを発展させてみよう」と思いつきました。

ちょうど手もとにあつた「はなやさん」という歌を教えてみると、気運が熟していたときでもあり、内容もかわいいのですぐに覚えてしまつて、帰り仕度のときなども、子どもたちだけではなく歌いだされました。

これなど、題材がきれいなものである上に、誰でも簡単に創造的なものが作れるのでこのように発展したのでしょうか。全く子どもたちにヒントを与えてもらつたようなものでした。

花を箱にさして、だんだんに花壇らしくなつていくときのうれしさな顔、輝いた目、あのときがうまくいったのだな、と思いました。

これらの中とまつた自發的な活動というものは、子どもたちが園の生活に充分慣れて、安定感をもつて思う存分自分を發揮するようにならなければ、中々あらわれてきません。ですから、この種の活動について考えたときに、五歳児を除いて、三歳児・四歳児は秋以後におもしろいあそびがよくみられます。